

いずれにせよ、精神鑑定で精密検査をうけるような犯罪者では、47人中30人(64パーセント)が、脳になんらかの異常を示していたことになる。なお、形態学的な異常に限っていうと、検査を受けた犯罪者39人中18人(46パーセント)に、目に見える異常所見があったということになる。

次に、犯罪者を「殺人」と「その他」に分けてみると(表3-3) 殺人群32人中、「形態異常あり」が半数以上の17人(53パーセント)を数え、「その他」の群7人中の「形態異常あり」 1人(14パーセント)を大きく上回る。

ただしこの資料では、「その他」の群の数が少なすぎるため、統計学的な検定ができない。

しかし、作田明博士は最近、自分の鑑定例17例と私のケース50例を加えた67例の資料を用いた研究論文を発表した。作田博士によると、殺人者42人中の異常所見者は21人(50パーセント)その他の犯罪者15人中の異常所見者は2人(13パーセント)で、二群の有所見率は私の50例の資料とほとんど同じだが、例数が大きくなったこともあり、二群の間に明瞭な有意差が証明された。

いずれにせよ、殺人者の脳の形態異常の比率が50パーセント前後ということ是非常に高い数値である。さらに、大量殺人群では検査した15人中10人(67パーセント)に異常が認められたことも注目される。

ところで、脳の健康診断といわれる脳ドックなどでは、まったく臨床的な症状がない人でもクモ膜のう胞や無症候性の多発梗塞などが発見されることがある。しかし、その有所見率はおおむね1パーセントといわれている。その数字と比較すると、殺人者中の有所見率は、一般人口中の有所見率の50倍にも達していることになる。

もし、脳に所見のある人もない人も同じ確率で殺人を犯したと仮定すると、殺人全体でも、重大殺人群でも、有所見率は脳ドックと同じ1パーセント前後になるはずである。

表3-3. 罪名別の脳の形態異常の有所見率

罪名	形態異常あり	形態異常なし	計
殺人	17(53%)	15(47%)	32
その他	1(14%)	6(86%)	7
計	18	21	39

立花隆氏の直観

さて、1995年11月、シチリア島エリチェでは、内分泌攪乱物質の神経および行動への影響を研究する専門家18人を集めた会議が開催され、次のような合意が採択され、発表された。

ホルモン攪乱物質は、神経や行動の発達を根本から阻害し、その結果、子宮内でそうした化学物質にさらされた胎児の可能性を蝕む。

発達途上の脳へのホルモン攪乱物質の暴露は、脳の構造および機能に恒久的な変化をもたらす。

生命の始まりの時期に人間や動物がそうした多種多様な化学物質にさらされた場合には、成人では恒久的な変化をもたらさないレベルの暴露でも、脳の発達には甚大かつ不可逆的な異常を与えてしまう。

このことは、知的能力や、社会への適応力の減少、周囲の要求に応える力など、多種多様な機能的行動の障害といった形であられる。このような、人間ならではの特質が広範囲に失われることは、社会そのものを変えてしまう。

(キャドバリー著、古草秀子訳『メス化する自然』集英社)

また、コルボーンらは『奪われし未来』の中で訴えている。

私たちの行動、知性、社会的認知といった、人間を人間たらしめている得がたい特質を根本から蝕み、変えてしまうホルモン攪乱化学物質の力を恐れています。危険にさらされているのは、ただ単に人間一人ひとりの運命ではなく、もっとも影響に敏感な弱者に限らず、人類すべての可能性が広範囲に侵食されていることなのです。

日本の評論家・立花隆氏も、環境ホルモンの脳に対する影響と、近年問題となっている少年少女の問題行動との関係について、『環境ホルモン入門』(立花隆編、新潮社)の中の対談で、次のように語っている。

「ぼくが最も深刻だと思っているのは、実は環境ホルモンが神経系に与えた結果として起こる、性行動以外のいろいろの行動異常なんですよ」

「ぼくが今いちばん気にかかっているのは、このところ立て続けに起きている、中学生の信じられない行動ですよ」

「こんな現象がこれほど突然、爆発的に蔓延するというのは、これまで識者が説明しているような、学校教育が悪い、親の教育が悪いというのとは違うレベルの事態が起きていると思うんです」

「人間の中のキレさせないメカニズムは何かというと、抑制系の神経系です。神経伝達物質でいえば、セロトニン系の神経伝達の回路がおかしくなっているという可能性。ぼくは可能性が三つ考えられて、一つは抑える力が弱くなっている。それから爆発が強くなっている。もう一つは、いろいろな回路を総合的に調整する能力が失われている」

立花氏の、評論家としてのこの直観は、精神医学の文脈ではどのように考えられるであろうか。われわれは、児童精神医学の領域で現在いったい何が起きているのかを次に見てゆきたい。

「『子どもの脳が危ない』 福島章 PHP新書」より